

平成29年度 全国学力・学習状況調査における

北九州市立 赤崎 小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成29年4月18日(火)に、6年生を対象として、「教科(国語, 算数)に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にさせていただきたいと思っております。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2. 調査内容

- (1) 教科に関する調査(国語, 算数)

主として「知識」に関する問題(A)	主として「活用」に関する問題(B)
<ul style="list-style-type: none">・身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容・実生活において不可欠であり、常に活用できるようにになっていることが望ましい知識・技能	<ul style="list-style-type: none">・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力・様々な課題解決のための構想を立て実践し、評価・改善する力

- (2) 児童質問紙調査

児童質問紙調査
○学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

※本校の6年生は、単学級ですので、個人が特定されないように公表の方法については、配慮しています。

3. 教科に関する調査結果の概要

(1) 全国・本市の学力調査(国語A・B, 算数A・B)の結果

本年度の結果	国語A		国語B		算数A		算数B	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	11.0	74	5.1	57	11.6	77	4.9	44
全国	11.2	75	5.2	58	11.8	79	5.1	46

(2) 本校の学力調査結果の分析

国語A	全体的な傾向や特徴など	・全国平均正答率を下回っていたが、内容の中心を明確にして書く問題は基礎ができていた。 ・俳句の情景をとらえる問題に課題が見られた。
	よくできた問題	相手や意図に応じ、内容の中心を明確にして書く問題は、正答率が高かった。
	努力が必要な問題	学年別漢字配当表に示されている漢字を正しく書く問題の正答率が低かった。

国語B	全体的な傾向や特徴など	・全国平均正答率を下回っており、理由を明確にして、自分の考えをまとめる問題の無回答率が高く、苦手意識をもっている児童が多い。
	よくできた問題	読む能力を問う問題は、正答率が高かった。
	努力が必要な問題	目的や意図に応じて、場に応じた適切な言葉遣いで自分の考えを話す問題は、正答率が低かった。

算数A	全体的な傾向や特徴など	・全国平均正答率を下回っており、重さや長さの任意単位による測定、面積などの量と測定の正答率が特に低く、苦手意識をもっていることが分かった。 ・算数の計算についての力が不足しており、基礎的な計算力を付ける必要がある。
	よくできた問題	最小公倍数を求める問題は、正答率が高かった。
	努力が必要な問題	□を用いた式で表したり、二次元表の合計欄に入る数を求めたりする問題の正答率が低かった。

算数B	全体的な傾向や特徴など	・全国平均正答率を下回っている。無回答率も高く、自分の考えを記述することへの苦手意識が高いことが分かった。
	よくできた問題	示された考えを解釈し、数が変わった場合も同じ関係が成り立つことを図に表現する問題は、他の問題に比べてできていた。
	努力が必要な問題	式の中の数の意味を、表と関連させながら正しく解釈し、記述する問題の正答率が低かった。

4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の概

質問紙調査の結果分析
<ul style="list-style-type: none"> ・感想文や説明文を書く、自分の考えを説明したり文章に書いたりすることが難しいと感じている児童は、全国に比べ高い。 ・将来の夢をもっている、自分にはよいところがあると答える児童は、全国に比べても高い数値にある。 ・平日に勉強量が1時間未満の児童が4割強、休日に全く勉強しない児童が4割弱、勉強量が1時間未満の児童が全体の4分の3を占めていることが課題である。家庭学習の大切さを伝え、家庭に協力を求めていく必要がある。 ・平日に1時間以上、テレビを見る・ゲームをする携帯電話を操作する・インターネットをする児童の割合が全国平均に比べ高いことが分かった。これらの時間を減らし、家庭学習に時間を充てなければならない。

5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科に関する取組(全校で・学年で・学級で)

<ul style="list-style-type: none"> ・「話し合う活動」と「書く活動」を一単位時間に必ず位置付ける。特に「書く活動」の習慣化を目指す。 ・学力向上のための特設時間(朝自習)「赤崎タイム」を継続して実施する。 ・過去問題、アシストシート、学力定着サポートシステムの活用を図る。
--

② 家庭生活習慣等に関する取組

<ul style="list-style-type: none"> ・「赤崎小家庭学習の手引き」等を用いて、家庭学習の内容や時間等を引き続き家庭に啓発していく。 ・全国学力・学習状況調査、CRTの課題と取組を保護者へ周知する。(学校だより・ホームページ) ・小6スクリーニングによる中学校教師の授業参観を行い、課題解決の方法を共に探る研修会を実施する。
--